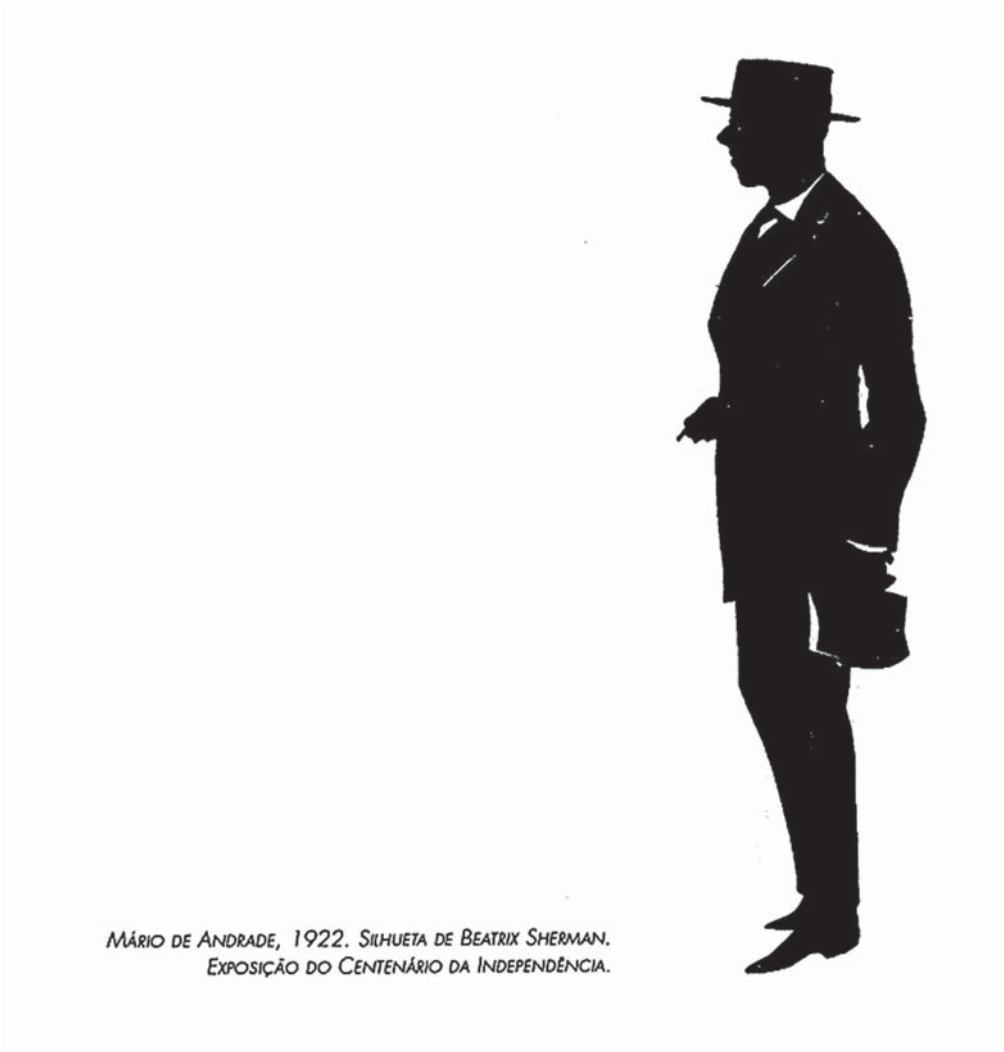


「イピランガのもつれ騒ぎ」 (冒瀆的なオラトリオ)

マリオ・ヂ・アンドラーヂ『狂乱のサンパウロ』(1922年)より
崎山政毅(訳)



ああ、悲しい。
昔の思いを胸に秘めつつ、今の思いに胸つぶるとは。*1
シェイクスピア

歌い手の配役

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味^{*2}（作家たちおよびその他の称賛に値する芸術の大家たち）：ソプラノ，コントラルト，バリトン，バスからなる大袈裟で威圧的できちんと調律されたコーラス

中風で震える老耄の群れ（百万長者どもとブルジョアジー）：カストラートのコーラス

無関心な棺担ぎたち（労働者，貧しい庶民）：バリトンとバス。

愛国青年団^{*3}（われわれ）：テナー，つねにテナー！　すぐにヴァルター・フォン・シュトルツィンクに尋ねよ！

わが狂乱：コロラトゥラ・ソプラノ。ソリスト。

オーケストラおよびバンドの伴奏

パフォーマンスの場所：市立劇場まえの広場^{*4}。バンドとオーケストラは庭を見下ろすテラスに陣取る。巨匠たちが指揮するのは約5,000人の楽器奏者たち…海外から招いた。ソリストが歌うときには、オーケストラは音をたてない——ただし厳密に意図されたいくつかの場面を除く。たとえそういう場面でも、そのさいに楽器は巨匠たちの機嫌を損ねるように音を出す。因習にとらわれた東洋趣味の数々がコーラスしている間は、バンドはオーケストラに合わせて演奏する。壮麗な^{トクツティ}総奏。

愛国青年団が歌うときには（当然、十分なリハーサルは行わないでおく）、楽器の多くは静寂に徹する。いくつかの楽器は調子外れに音を出す。その他の場合、弦楽器は弦をパチンと鳴らす。ヴァイオリン，フルート，トランペット，打楽器，その他木管楽器^{ボレ}やマラカスは魂を引き裂くような自由気儘なテンポ^{ルバ}を維持してよい。

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味は市立劇場の窓際およびテラスにとどまる。中風で震える老耄の群れは、自動車クラブ，市役所，焼き肉レストラン^{ロウ}，ホテル・カールトン，そして遙かに離れたアルヴェス書店のバルコニーに陣取る。無関心な棺担ぎたちはチャー高架橋から金切り声を上げる。しかし愛国青年団は〔チャー高架橋〕下のアニヤンガバウー公園^{*5}の土中に自分たちの足を埋めて立ち、わが狂乱は彼らの只中にある。

「イピランガのもつれ騒ぎ」(冒瀆的なオラトリオ) (アンドラーヂ／崎山)

新たなる日の^{アウローラ}曙光

前奏曲

数台のスネアドラムが夜明けを告げる。550,000人*6の歌い手すべてが、すぐさま咳払いをし、大袈裟に深呼吸をおこなう。木管楽器、金管楽器、オルガン、すべての打楽器の順で、長く思索にふけるような沈黙のさなかに、テーマを展開もせず和音も奏でずに演奏する。“人がサマザマナ慰メラコノ世デハ沢山持ッテイナイ、トイウノガ、シバシバ、ムシロ有益デマタ安全ナコトデアル、コトニ肉ニ随ウ慰メデハ”*7。

そして冒瀆的なオラトリオがはじまると、その名が音を突き破って告げられる。

イピランガのもつれ騒ぎ。

愛国青年団

(ピアノッシモで ppp)

われわれこそ愛国青年団！
バナナの木にはためく三角旗、
コンゴウインコのエメラルド色、
ハチドリのリビー色、
アカハラツグミとウミオウムの叙情、
パイナップル、マンゴー、カシューナッツ
それら自身をとどめたまえ、勝利の裡に
世界の神鳴る称賛のなかに！…
われわれこそ愛国青年！
われらが生まれし土の生命力、
彩飾された無知蒙昧、
薄明の新たなる太陽の群れ、
献身の極みの只中にあり！…
すべては世界の友愛に満ちた音楽のために！
われわれこそ愛国青年団！

無関心な棺担ぎたち

(憂鬱な一斉射撃)

騒ぎはごめんだ！ 騒音はもうたくさん！
こいつらは俺らをちっとも眠らせてくれねえだろうが！
プッチーニの「星はきらめき」*8でも歌いやがれ！
おお！ ぎごちない薄馬鹿、不器用な土くれめ！
行っちゃまえ！ 俺らを起こすようなやつはあっち行け！

(コントラバスの半音階クレッシェンドによってオーケストラが告げる…)

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味

わしらは因習にとらわれたもろもろの東洋趣味！
わが礎は崩れてはならぬ二度とふたたび！
上昇も頂点も無し！
愛するは退屈な平坦さ！
でこぼこの枝葉のペロバ樹^{*9}をぶった切り！
憎むは夜通し続く道化たちのばか騒ぎ！
ゴミ回収と道德慣例，万歳！
わしらは因習にとらわれたもろもろの東洋趣味！

すべてのアルマジロのためにフォン・イェーリング^{*10}を備えるべし！
毒蛇のために活力あるブラジルを装備するべし！
すべての豆壺は同じ秤たるべし！
唯一の貴き足並みは頭黒禿鶴^{*11}の足運び！
バカエンブー地区に存する聖なる様式美！
わが父祖たちこそ真の男なり！
お前らに充分いきとどくロウソクがなかっただと？ もっと付けんか，光！
わがコーラスは終始“ド”！
調子っぱずれの輩には鞭打ちつきの訓練を！
わしらは絹のケープをまとうから，お前らはひたすらチリを払えよ！
日々食卓にのぼる牛の蹄のゼリーよ！
ベル・オムニア・サエクラ・サエクロルム
世々ニ至ルマデ^{*12}搾取工場は保ちますように，搾取のための石臼を！
毎年変わらずフロックコート，手などとおすかスポーツコート！
訪問に時間を割くのは，骸骨となったわが大祖母！
同輩たちに栄光あれ！ 一人がすべてを！ すべてが一人を！
わしらは因習にとらわれたもろもろの東洋趣味！

愛国青年団

(不協和音によって混乱をきたしつつ，ためらいがちに前より大きな声で再び歌い出す)
夜明けの魔法がマグノリアと薔薇のあいだに…
消えゆく星の祈りは誰かの目にとまり…
——イカロスのパンは青に染まった恍惚のテーブルクロスの上に！
ボタンインコが望むのはわれらが幻影！
デルンクェスセンシアス スアヴィロケンシァス
犯罪と怠惰のさなかに心地よく耳朶をうつ音声
それは荒地の声，おおいなる陽の光のもとに！…
壘壁を護ろう！ 攻撃せよ，アザミをもちて！
自らをイバラで深く傷つけよ！ 大地に身を擲て！

「イピランガのもつれ騒ぎ」(冒瀆的なオラトリオ) (アンドラーヂ／崎山)

ワルキューレたちが連れに来るだろう、瞼を閉ざしたものをめざして！
進め！ けして立ちどまるな！ 打ち捨てよ、疑いを
そして逡巡を、とこしえに！

無関心な棺担ぎたち

(メヌエットのテンポで)

こいつらは誰だ？

マイオールメノール
大きい小さい

金持ちならばどんなによいか！

大きい小さい

俺らの安楽椅子から

大きい小さい

俺らは彫像を眺める

大きい小さい

シニョール・シメネス^{*13}

——かの偉大な彫刻家！

俺らがほめたたえるのは、高名で

好評の御仁だけさ、今度も！

画廊のオーナーはだれでも

ブグロー^{*14}の作品を飾るもんだ！

オペラ座の会員登録は？

道徳にもとづくエレガンス！

だけど何とも退屈な

マイオールメノール
長調短調の

『トリスタンとイゾルデ』！

長調短調大きい小さい

俺らが好きなコーラスは

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味のやつさ！

その次にサンチョっぽいやつ

(ああ！ 仲間たちよ、ぐっとくるじゃないか！)

それも朝もあけほのより早く

パイッサンドゥー広場^{*15}で聞くやつよ！

街路を広げろ…

くわえて悪習もか？

できやしねえ！ できやしねえ！

大きい小さいの
だけど誰も言いたくはないだろうさ
大きい小さいの
こいつらは誰だ、とは
誰が土の中から歌っているのか、とは。

(オーケストラが、ティンパニが発する大爆笑の音の後で突然演奏をやめる)

わが^レ狂^レ乱

^{レチタティーボ}
(バラッドを叙唱で)

月光のドラマたちは窓に走る割れ目で秘密裡に演じられる
闇のなかを丹念に調べつつ…
背信行為、論抑圧せんとする！
そして東洋風情熱、おべっかでベトベトする！

白く泡立つこれらの潮流
さらには海崖がもつ打ち勝ちがたい全能！
打ち勝てないのか！ おお！…
わが声は輝く五指をもっている
それらは主の口唇を逆なでするだろう。
しかし濡れ羽色の錠たちは
ジャカラング樹の根に絡み込んできた点

渦を巻き翼列する滝の脳髓たち
そして澄み渡ったブラジルの朝の優しさよ！

(ハープが一斉にグリッサンドを鳴り響かせる)

白き大嵐のこれらの雲
そして洗礼の雨を許さない屋根の群れ！
意図的に！ おお！…
わが両の眼は緑色に極まる口づけを発する
主の御足に向けて。
しかし震えるわが両手はまさに
クバタンウ^{*16}の裾に隠され…

渦を巻き翼列する滝の脳髓たち
そして澄み渡ったブラジルの朝の優しさよ！

(金管楽器群のロングトーン)

色褪せた収穫期のトウモロコシの穂よ

「イピランガのもつれ騒ぎ」(冒瀆的なオラトリオ) (アンドラーヂ／崎山)

そして肥沃さを奪い取るシバムギの叢！
もつれ込んで！ おお！…
わが両膝は敬虔さのあまり頹れ
主の御胸を蹴り飛ばすだろう。
しかし黄金色に極まるわが血はため息をつく
コーヒー農園の枝に織り込まれ…

渦を巻き翼列^{カスカクタ}する滝の脳髓たち
そして澄み渡ったブラジルの朝の優しさよ！

(ハーブ、金管楽器、オルガン)

無関心な棺担ぎたち

(ガボットを踊り出しながら)

あの女郎は誰だ？
あいつはイカレてる、まったくイカレてる
なんせ地面を這いずっているんだぜ！

愛国青年団

(突拍子もないクレッシェンドで)

憎悪、嫉妬、不運！…
神なき信仰！ 駆け引きのための愛国心！
盲いてしまえ！
清めの涙の失墜！
われわれは仮面舞踏会を望んでいないぞ！ なおさらのこと
余計なものだらけの“アボカドの花”カーニバルなど！
光明の雑踏！…われらが先達たちの教訓！…
そして世界への生の統合！
すべての道は同じ目的へと向かっているのだ！…
そしてたったひとつの祖国、一体となった、不可侵の、
世界の祝福に向けて出発した祖国！
熱情にみちたわれらが狂乱を荒れ回らせよ！
われらが予言の騒乱語で圧倒せしめよ
おおいなる聖母マリアの予言を！
われわれこそ愛国青年！
パッシフローラ^{バッシフローラ} エスパント^{エスパント} ロックウーラ^{ロックウーラ} デーゼジュ^{デーゼジュ}
トケイソウ^{*17}！ 驚異！ 狂気！ 欲望！
クラヴオス^{クラヴオス}
馬蹄釘^{*18}！ 十字架にわれらを打ちつける釘をもっとだ！

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味

(ダ・カーポ)

なぜ釘なんだ？ なぜ十字架？
自分たちを常識で広めよ！
お前らの父祖への道義を持って！
魂をつねに理性で満たせ！
そしてハンモックで昼寝しろ！
6時に目を覚ませ、寝るのは夜8時半^{*19}だ。
そして週に一度はアルカリ石鹸で身体を洗え、
塵を払って、ニキビ^{エルブサンツ}を落ち着かせろ…
そしてあくびが出るほど退屈な、四季のない世界を大切に扱え！…
春、冬、夏、秋…
季節が何の役に立つ？

愛国青年団

(今や金切り声で)

犬どもめ！ 犬にも劣るケダモノめ！
われわれこそ愛国青年団！
トンマなロバ野郎！ 悪魔^{マウディトッ}！ 犬畜生！ 犬にも劣るケダモノ！

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味

(葬送行進曲の演奏が続いているが、徐々に音量が大きくなっていく)

トンマなロバ野郎だと？ 犬畜生？
秩序ある生産性、マラリア万歳！
正確なインチ刻みの間歇性発熱！
建築はフランス風ルネッサンス様式。
音楽は、ヴェルディ。彫刻はフェイディアス^{*20}。
絵画はコロロー^{*21}、詩はルコント^{*22}。
散文はマセード^{*23}、ダヌンツィオ^{*24}、そしてプールジェ^{*25}だ！
そして人生においては、最終的に、永久なる永遠の、
ランプの灯火のもと淑女たちが縫物をし、
ドイツ製のピアノ^{*26}で演奏されるゴダール^{*27}のワルツ、
夫も、妻も、その娘たちも、婚約者^{*28}も…

愛国青年団

(常軌を逸した悲鳴で)

くたばれ！ 薄ら馬鹿^{ボサイス}！ 犬畜生！ 犬にも劣るケダモノ！
われわれこそ愛国青年団！

「イビランガのもつれ騒ぎ」(冒瀆的なオラトリオ) (アンドラーヂ/崎山)

トケイソウ! …貴様ら、^{マウディートゥス}悪魔め! ^{ボサイス}愚か者!

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味

(フォルテシモ fff)

…日曜日ごとのそぞろ歩き、トリアノン^{*29}でお茶を…
そしてかの……都市……かの……都市の群れ、
かの……都市の群れ……かの……都市の群れ、
一千もの……都市… [1]

愛国青年団

(フォルテシモよりも強く ffff)

このクズども! ^{ポーラス}酔いどれ! ^{ベーベドゥス}卑劣漢! ^{インファメス}くそ野郎! ^{マウディートゥス}
トケイソウ! 驚異! 狂乱! あ…^{*30}

因習にとらわれたもろもろの東洋趣味

(さらに大音量で fffff)

…そして不^{ベルベトゥイーターヂス}朽性

わしらのもろもろ^{ヴァニダーヂス}の虚栄心を満たす、^{セレブリダーヂス}名士たちがもたらす。
^{アンティグイダーヂス}骨董品から^{アトゥアリダーヂス}最新のニュースにいたるまで、
^{イダーヂス}寿命が^{デジグワッダーヂス}尽きて不平等がなくなるまで、
そは誰かといえば…

愛国青年団

(へとへとになりながらも、狂乱し、意気軒昂に)

貴様ら……………!!!

(……部には、読者の知る限りでもっとも卑猥な罵倒の言葉を入れること)

われわれは愛国青年団!

トケイソウ! 驚異! 狂気! 欲望!

馬蹄釘! …もっと釘を…その…われらの…

(沈黙。因習にとらわれたもろもろの東洋趣味は、無関心な棺担ぎたちとならんで、
偉大で至高なる唯一の真実に耳をそむけて、逃げ出し身を隠す。オーケストラは恐れ
れ慄いて消え去ってしまう。巨匠たちはへたり込む。しかも夜が更けてくる。そして、
満天の星がきらめく夜のしじまの中、愛国青年団は、地に倒れ伏しながら、精神錯
乱の極みに達した悔恨にうちひしがれて、泣いている。)

[1] ここで読者は、もろもろの東洋趣味の味方であるならば、自分が敬愛する作家たちの名をサンパウロ
につけること。そうでなくて、愛国青年団の側の場合、軽蔑する作家たちの名をつけるように。たと
えば、ほく自身の名前でもよい。つまり、^{マリオンダーヂス}マリオシティとか。そうした接尾辞は存在しないが。ただ
しばくは、よりよいリズムで演奏するためにだけ、そうしたやり方を望んでいる。

わが狂乱

(やさしく子守唄を歌い聞かせる)

泣け！ 泣け！ そして眠れ！
ヴェルヴェットのような安らぎを到来させよ
君らの肉体にまとわせんがため！…お休み！
大地に君らの唇をつけよ！ 大地に君らの目を向けよ！
君らの最後の口づけ、君らの最初の涙は
無垢なる受胎のためのもの！
緑野に君らの魂を撒き散らせ！
レインツリー^{*31}の森蔭のマントのなかに飼い続けよ
君らの内なる蛍を！
それでもなお明日黄金色に陽光は射すだろう！
泣け！ 泣け！ そして眠れ！

優しい夜が星のきらめくその指をのばし
われらの両眼を閉ざすだろう…
青き宵闇よ！…
君らの子守歌のための透きとおった声、声！
だが南十字星と殉教への郷愁は…
ゆるやかに揺れて行き来する！ 揺り籠のように揺れて行き来する！
濃い夜想曲のワインのように！…
だが20年にわたって種がまかれた土壌は花を咲かせるだろう！
純潔の花が咲き誇るいくつもの9月が来るだろう！
実がむくむくと膨らむ、燦々たる光が降るいくつもの12月が来るだろう！
コーヒーの果実が色づく、いくつもの2月が来るだろう！
成熟のいくつもの3月が来るだろう！

祝祭を準備するいくつもの4月が来るだろう！
そしてそれらの20年、種がまかれた土壌は花を咲かせるだろう！
そしていくつもの5月が！ そしていくつもの5月が来ることだろう！
聖母マリアへの祈り…あちこちで打ち鳴らされ重なり合う鐘の音…誓いのミサの数々…
高まる祈祷の声…溢れ出す神への感謝…
追想を栽培することになるわけだ！
南十字星と殉教への郷愁を
君らが夢見ている夜の墓石にとどませよ！
それが大切か、だって？…君らに穏やかに教えてやろう
おお！ 愛国青年団よ、わが兄弟たちよ。
泣け！ 泣け！ そして眠れ！

ヴェルヴェットのような安らぎを到来させよ
君らの肉体にまとわせんがため！…お休み！

長く長く、歌を歌い、倒れ伏せ。

薔薇…蝶…夜露…

理由なく犠牲に供された者たちが生きたまる一日…

君らの心を閉ざせ！

夜をしてその向こう側の髪を降ろさせよ

切り裂かれた者たちが感じる灼熱の傷口へと！

そして最後に光あふれる弔い、(泣け！)

凧いだ浜辺の、(泣け！)

ゲアラニ人の背信を欠いた原生林の

(そして眠れ！)

びくともしない平和で君らを埋葬せしめよ！

ヴェルヴェットのような安らぎを到来させよ

君らの肉体にまとわせんがため！…お休み！

(眠りに落ちつつ、ほとんど微笑んで)

ほく…砂漠…カインの群れ…呪い…

(愛国青年団とわが狂乱は永遠に耳を閉ざして眠る。その傍ら、宮殿や劇場や写真展やホテルの窓——開け広げられてはいるが、ブラインドの降りた——から、ホイッスル、ロバの鳴き声ラッパ、ドンドンという足踏みからなる、耳を聳する野次が浴びせられる。)

ラウス・デオ
神に讃えあれ

訳注

- *1 ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』、第三幕第一場、オフィーリアの科白より。

O woe is me

To have seen what I have seen, see what I see!

河合祥一郎訳『新訳 ハムレット』、角川文庫、2003年、103ページ。

- *2 フランスでの東洋趣味の流行をふまえ、転じて「フランスかぶれ」の意。
*3 ブラジル国旗が「緑と黄金(アウリヴェルヂ)」色であることから転じて、愛国者の意。
*4 1911年竣工のパリ・オペラ座を模した大劇場(図1)。
*5 サン・パウロ周辺に居住していた先住民の言葉で「悪しき精霊」(アニャン



図1 サンパウロ市立劇場(1922年)

ガー Anhangá あるいはアニャンガバ Anhangaba) に「河(水)」(言葉の末尾に「イー y」あるいは「ウー ú」がつく) が付いた名称。植民地初期の入植者たちが炊事や洗濯用にアニャンガパウー河の水を用いたと伝えられる。チャー高架橋下にいくつかのセクションに分かれながら広がる、広大な河川敷公園(図2)。



図2 チャー高架橋。アニャンガパウー溪谷にフランス人ジュール・マルタンによって設計・建設された、サンパウロ最初の陸橋。下がアニャンガパウー公園。

*6 1922年時点でのサンパウロ大都市圏の総人口。

*7 原文は以下のとおり。“Utilius est saepe et securius quod homo non habeat multas consolations in hac vita.”
*これはトマス・ア・ケンピス(Thomas à Kempis 1380?-1471)の『キリストにならいて *De Imitatione Christi*』(1472)の第1巻21章3節の一文。訳はトマス・ア・ケンピス, 大沢章/呉茂一訳『キリストにならいて』岩波文庫, 1960年, 48ページを採った。

*8 ジャコモ・ブッチーニ作『トスカ』第三幕で、主人公トスカの愛人マリオ・カヴァラドッシが、サンタンジェロ監獄で処刑を待ちながら歌いあげるロマンツァ。1900年作品。

*9 ブラジル産の硬材。

*10 ルードルフ・フォン・イェーリング (Jhering, Rudolf von 1818-1892)。19世紀ドイツの法学者, ローマ法の権威で法学における社会的目的を重視し目的法学の基礎を築いた。原文では Von Ihering となっている。

*11 南米にのみ産するコウノトリ。邦名どおり, 頭部が黒色のハゲコウの仲間である。

*12 ミサ聖典の司祭と聴衆との遣り取りで、「カノンの結びの栄唱」の最初に司祭が唱える語句の末尾部分。

*13 エットレ・シメネス (Ximenez, Ettore 1855-1926)。イタリアはパレルモ生まれの彫刻家でロダンらと親交を結んだ。現在はサンパウロ市の独立記念公園 (Parque Independência) になっているイピランガの丘に、1922年の独立百周年を記念して、ブラジル初代皇帝ドン・ペドロ1世が発した独立宣言「イピランガの叫び *grito do Ipiranga*」の題名をもつ独立記念像 Monumento à Independência を制作した。

*14 アドルフ・ウィリアム・ブグロー (Bouguereau, Adolphe William 1825-1905)。ローマ神話をモチーフとした作品を多作したフランスの画家。

*15 パイッサンドゥー広場 (Largo do Paissandú, 現在は Paçandu あるいは Payssandu と表記されることが多い。図3) は、市立劇場から北へ400メートルほどのところにある教会前広場。ウルグアイの同名都市へのオマージュとして1865年に命名された。



図3 パイッサンドゥー広場

*16 クバタンウ (Cubatão) は、サンパウロ南東40キロメートルに位置する、

「イピランガのもつれ騒ぎ」(冒瀆的なオラトリオ) (アンドラーヂ/崎山)

同名の山系の南麓の都市。山の急傾斜を用いた水力発電所(「渦巻く翼列の滝」)を有し、サンパウロ等に送電している(図4)。



図4 クバタンウ山系とクバタンウ河

- *17 トケイソウはキリスト受難の象徴。花言葉は「宗教的熱情」「聖なる愛」など。
- *18 十字架を用いる磔刑のさいに手足を打ち付ける釘。
- *19 原文では *deitar às vinte e meia*. 24 時間法での表記を「午後」に変えた。
- *20 Pheidias (circ. B.C. 490-440)。アテナイ生まれの彫刻家で、アクロポリス復興にあたってパルテノン神殿造営の総監督を務めたといわれる。
- *21 ジャン・バプティスト・カミーユ・コロー (Corot, Jean-Baptiste-Camille 1796-1875)。フランス・パリ生まれの風景画家、バルビゾン派の領袖。
- *22 シャルル・マリー・ルネ・ルコント＝ド＝リール (Leconte de Lisle, Charles Marie René 1818-1894)。インド洋南西部に位置するフランス植民地レユニオン島サン・ポール市生まれの詩人。アカデミー・フランセーズでユゴー没後の席を襲った。ギリシア・ローマの古典に範をとる高踏派 (Les Parnassiens) の中心的人物。
- *23 ジョゼ・アゴスティーニョ・ヂ・マセード (Macedo, José Agostinho de 1761-1831)。ポルトガル・ベジャ生まれの詩人。いったんアゴスティーニョ修道会に入るも、素行不良で除名。当時のポルトガルの「詩聖」カモンイスに対抗して叙事詩『東洋 *Oriente*』(1814 年) を発表。後には風刺詩『ロバ *Os Burros*』や政治批判の『皮を剥がされたけだもの *A Besta Esfolada*』などの寸鉄刺すような表現で知られた。
- *24 ガブリエーレ・ダヌンツィオ (D'Annunzio, Gabriele 1863-1938)。イタリアの詩人・ジャーナリスト・小説家・劇作家・兵士・ウルトラ＝ナショナリストの冒険家。毀誉褒貶半ばする政治的な表現者だが、世紀転換期にロシアも含むヨーロッパ全体に彼の文学が与えた影響は——その作品群の知名度の低さに反比例して——大きい。
- *25 ポール・ブルジェ (Bourget, Paul 1852-1935)。フランスの心理主義重視の作家・批評家で実証主義や科学主義を徹底して批判した。作品に大騒動を巻き起こしたことでベストセラーとなった『弟子 *Le Disciple*』などがある。同作品の主人公アドリアン・シクスト (Sixte, Adrien) の名は、本作品が収められている『狂乱のサンパウロ』献辞に登場する。
- *26 1922 年時点で世界に知られたいわゆる「ピアノ御三家」のうち、スタインウェイ社のハンブルク工場は生産停止しており、ベーゼンドルファーはオーストリアに本社・工場ともあった上に帝国解体で十分な生産を再開できておらず、ベヒシュタイン社のみがロスチャイルドの支援のもとで生産を行っていた。以上の事実から「ドイツ製のピアノ」はベヒシュタイン社の製品を指していると思われる。
- *27 バンジャマン・ゴダール (Godard, Benjamin 1849-1895)、フランスのヴァイオリニスト・ロマン主義の作曲家。8つのオペラをはじめ、「ゴシック交響曲」(1883 年)、「東洋交響曲」(1884 年)、「伝説交響曲」(1886 年) のシンフォニー三部作など多くの作品を残した。ちなみにここで触れられているゴダールのワルツは作品番号 116 の「三部からなる連曲」のフルートとピアノをそれぞれソリストが演奏するものであろう。
- *28 婚約者のみ単数形。

*29 トリアノン公園（公式にはシケイラ・カンボス公園）は、サンパウロ市中心部のパウリスタ大通りに面した閑静な公園で、サンパウロ建設以前の自然林が保存されている（さらに同名のトリアノン宮殿は、1921年にパウロ・メノッティ＝デル＝ピッキア（Menotti del Picchia, Paulo 1892-1988）の詩集『仮面 *As máscaras*』上梓の祝賀会が開かれ、オズヴァルド・ヂ・アンドラーヂ（Andrade, Oswald de, 1890-1954）がその挨拶において「ブラジルにおける言語表現の革命」を公然と提唱した場所である）。

*30 原文は "o d..."。男性名詞単数につく定冠詞 "o" から推測するに, "diabo"（「サタン」「悪魔」の意、あるいは「あっ?!」「ちっ!」といった間投詞）の頭文字か。

*31 原文では複数形で *manacás*、ブラジルでは *jeratataca*（単数形）とも呼ぶ。学名 *Albizia saman*、邦名はアメリカネムノキあるいはアメフリノキ。熱帯アメリカ原産でネムノキに似た花を咲かせ、猿が好んで食べる豆状の実をつける。対称形に枝を張り、大きなものでは樹高25メートル、枝張りは40メートルにもおよぶ（図5）。



図5 レインツリー(アメリカネムノキ/アメフリノキ)

解題

この翻訳は、マリオ・ヂ・アンドラーヂ（Andrade, Mário de 1893-1945年、以下マリオと略）の詩篇『狂乱のサンパウロ *Paulicéia Desvairada*』（1922年）の最後の三分の一強をしめるページェント劇刺「イピランガのもつれ騒ぎ（冒瀆的なオラトリオ）*As enfiaduras do Ipiranga (Oratório profano)*」の全訳である。マリオはブラジルの詩人・作家・民族音楽学者・ジャーナリスト・美術史家・批評家そして写真家と、多才というよりも多様な分野において超人的な成果をあげた人物であった。

ブラジル・モデルニズモ、すなわちブラジルのアヴァンギャルド表現は、マリオを中心とする人びとによって打ちたてられ、現在に至るまでその影響は大きく作用している（図6）。

さて、『狂乱のサンパウロ』は、のちに第13代ブラジル大統領



図6 近代芸術週間の主要メンバー集合写真 2列目中央がマリオ・ヂ・アンドラーヂ



図7 狂乱のサンパウロ 表紙

に就いた当時のサンパウロ州知事ヴァシントン・ルイス (Luís Pereira de Sousa, Washington 1869-1957) の全面的支援のもとで、サンパウロ市立劇場を舞台に1922年2月13日から17日にかけて開催された「近代芸術週間 *Semana de Arte Moderna*」のために書きあげられた作品である。

刊行された時点でのタイトルは、*Paulicea Desvairada* であり、中身の文体もさることながら表題にも「旧慣を崩して創りあげた新しいスタイルのブラジル (・ポルトガル) 語」の観がある (図7)。ちなみにマリオはこの作品を「処女作」として喧伝した。だがじっさいには、1917年にフランス高踏派のスタイルを模した詩集『詩の一篇一篇には血の滴りがある *Há uma gota de sangue em cada poema*』を上梓している。この1917年の作品は『マリオ・ヂ・アンドラーヂ全集』の第1巻にのみ「習作期の詩篇」として収められている。たしかにモデルニズモの渦を巻き起こした『狂乱のサンパウロ』と比べると、未熟さが際立つ出来ではあるが、重要なことはその点にあるのではない。

ブラジル・モデルニズモを事実上「運動」として駆動させ、表現における根底的な転換をもたらしたのはマリオら「五人組 "Grupo dos Cinco"」(図8)であったが、マリオ以外はヨーロッパ留学体験を持ち、未来派、キュビズム、表現主義などの「洗礼」を直接に受けてきた。一方、マリオは一度たりともブラジルを離れることはなかったが、彼の蔵書には当時ヨーロッパで最新の潮流を紹介してきたフランスの雑誌『エスプリ・ヌーヴォー *L'esprit nouveau*』(1920-1925, 建築家ル・コルビュジエと画家アメデ・オザンファンが共同で刊行していた。創刊から終刊まで通巻28号を数える) が全冊揃えられており、表現にかかわるマリオの感性のアンテナがどのように張り巡らされていたのかをうかがい知ることができる (現在はサンパウロ大学ブラジル学研究所マリオ・ヂ・アンドラーヂ稀観文書庫において保管されている)。

つまりは、1910年代後半以降、世界で同時多発的・越境的にはじまった新たな表現の実験・革命に、マリオもひとり孤絶して立ち会ったのではなく、まさしくその激動の過程を同時代の空気を海を越えて共有しながら、しかしブラジルに「根ざすこと」をつうじて自ら実践してみせたのである (図9-11)。

さて本訳稿だが、基本的に1922年のオリジナル版のファクシミリ・コピーに拠り、必要に応じて Andrade, Mário de, *Poesias completas*, ed. crítica de Diléa Zanotte Manfio, Belo Horizonte, Villa Rica, 1987, pp.103-115. を参照した。楽劇仕立ての構成は、サンパウロ中を巻き込む一大叙事ページェントとして想定されており、主役は「愛国青年団」や「わが狂乱」ではなく、むしろサンパウロという新興大都市そのものなのである¹⁾。

なお、ブラジル文学研究者のエディト・ピメンテル・ピントウによれば、マリオのブラジル (・



図8 新聞のカリカチュア 上には「サンパウロの“ドン・キホーテ”」、下の垂れ幕には「われわれには才能がある」と書かれている。前列でスネアドラムを叩いているのが、マリオ・ヂ・アンドラーヂ。プラカードの文句は、左上から時計回りに「カルロス・ゴメスのまぬけ」「ショパンはベリンバウ叩き」「ベルナルデッリは水瓶づくり」「コエーリョ・ネットウは足を洗わない」「アルメイダ・ジュニオールはいつもパン屋に代金を払わなかった」とある。ベリンバウとは瓢箪を縦に割ってつくる、武術カポエイラにつきもののリズム打楽器。Correio Paulistano 紙の1922年1月29日号に掲載されたもの。



図9 近代芸術週間ポスター（エミリアーノ・ディ・カヴァルカンティ作）



図10 近代芸術週間 絵葉書

Theatro Municipal
SEMANA DE ARTE MODERNA
PROGRAMMA DO PRIMEIRO FESTIVAL
SEGUNDA-FEIRA, 13 DO CORRENTE — A's 20.50 horas

<p style="text-align: center;">1.ª PARTE</p> <p>Conferência de Graça Aranha: A êscoção esthetica na arte moderna. Ilustrada com musica executada por Ernani Braga e poesia por Guilherme de Almeida e Ronald de Carvalho. Musica de camera.</p> <p style="text-align: center;">VILLA-LOBOS</p> <p>1 — Sonata II de violoncello e piano — 1916. A (Alegro Moderato) — B (Andante) — C (Scherzo — D (Alegro vivace sostenuto e final. Alfredo Gomes e Lucilia Villa-Lobos.</p> <p>2 — Tris Segunda (1916) violino, cello e piano. A (Alegro Moderato) — B (Andante calmo (Hercules-Rarcarola) — C (Scherzo-Spiritoso) — (Molto Allegro e final. Paulina d'Ambrosio, Alfredo Gomes e Fructoso de Lima Vianna.</p>	<p style="text-align: center;">2.ª PARTE</p> <p>Conferência de Ronald de Carvalho: A pintura e a escultura moderna de Brazil</p> <p>3 — Solos de piano — Ernani Braga. (1917) A (Valva Mystica — (Da simples collectanea (1918) B (Cavonessa Cantadeira — "Da sulle floral". (1921) C (A Flandeira.</p> <p>4 Oiteto — (Tres danças africanas)</p> <p>A (Farrapos — (Dança dos moços) 1914. B (Kankukus — (Dança dos velhos) 1916. C (Kankukus — (Dança dos moços) 1918.</p> <p>Violinos, Paulina d'Ambrosio, George M. Inuzsi, Alto, Orlando Frederico. Violoncellos, Alfredo Gomes, Baixo, Alfredo Carrazza, Flauta: Pedro Vieira, Clarino: Antão Soares. Piano: Fructoso de Lima Vianna.</p>
--	---

Preços para as 3 recitas:
CAMAROTES e FRISAS, 186\$000 CADEIRAS e BALCÕES 20\$000
Bilhets á venda no theatro Municipal e na secretaría do Automovel Club de São Paulo.

図11 近代芸術週間初日のプログラム（新聞広告）

ポルトガル）語文法に対する強い関心は、『狂乱のサンパウロ』刊行の年とちょうど重なるという²⁾。先行研究で詳細にこの作品全体を分析したものとしては、第一にアドリアン・ロイグの論文「マリオ・ヂ・アンドラーヂの『狂乱のサンパウロ』にみる詩的ランガージュ」³⁾を挙げなければならないだろう。だが、それらの成果をふまえた訳者自身の分析は、「イビランガのもつれ騒ぎ」（全22場）の前に置かれた、自らにあてた「献辞」と66パラグラフ（22×3）からなる「最高にイカした序文」、さらに本篇も入れて全22篇の詩からなる『狂乱のサンパウロ』の全訳が人文書院より近刊予定であり、その訳者解説において展開したく思う。

最後に、現在の日本語表記におけるブラジル・ポルトガル語ではSãoは「サン」ではなく、原発音に近い

「イピランガのもつれ騒ぎ」(冒瀆的なオラトリオ) (アンドラーヂ／崎山)

「サンウ」とされている⁴⁾。しかし本訳稿では São Paulo を人口に膾炙した「サンパウロ」表記とした。とはいえ、ルビ等における韻を示唆する際には、1をサンパウロ風に「ウ」とするといった試みを行なっている。そのため、現時点でのブラジル・ポルトガル語音韻論上の研究成果との統一性があまり取れていないとの誇りを免れないだろうが、あくまで翻訳上での試みとして考えていただきたい。

注

- 1) Perrone, Charles A., "Performing São Paulo: Vanguard Representations of a Brazilian Cosmopolis", in *Latin American Music Review* 23 (1), 2002, pp.60-78.
- 2) Pinto, Edith Pimentel, *A gramatiquinha de Mário de Andrade: texto e context*, São Paulo, Livraria Duas Cidades, 1990.
- 3) Roig, Adrien, "Le langage poétique de *Paulicéia Desvairada* de Mário de Andrade" ,dans *Quadrant* 12, 1995, pp.81-114.
- 4) 弥永史郎『ポルトガル語発音ハンドブック』, 大学書林, 2005年。

